

# 平家物語 劍卷

斯かくて嫡ちやく子し撰津守頼光の代となりて、不思議ふしぎ様々多おほくかりけり。中にも一の不思議ふしぎには、天下に人多く失うする事あり。死ても失せず、座敷ざしきに連りて集り居たる中に、立つとも見えぬ、出づるとも見えぬして、搔消かきけす様にぞ失せにける。行末ゆくへも知らず、在所しよも聞えずありければ、怖おそしと

いふばかりなし。上一いちじん人より下万民に至るまで、騒さわぎ恐おそる事申すに及ばず。是を委くはしく尋ぬれば、嵯峨天皇の御宇ぎよに、或公卿の娘、余あまりに嫉妬ねたみ深うして、貴船きぶねの社に詣でて、七日籠りて申す様、歸命頂礼貴船大明神、願くは七日籠りたる験しるしには、我を生いきながら鬼神きしんに成なてたび給へ、妬ねたしと思ひつる女、取殺さんとぞ祈りける。明神あはれ哀あはれとや覚おぼしけん、誠に申す所不便ふびんなり、実げに鬼にな

りたくば、姿すがたを改めて、宇治うぢの河瀬かはせに行きて、三七日  
漬ひたれと示現じげんあり。女房悦びて都に帰り、人なき処にたて  
籠りて、長たけなる髪をば五つに分け、五つの角つのにぞ造りけ  
る。顔には朱しゆを指し、身には丹にを塗り、鉄輪かなわを戴いたきて、  
三つの足には松を燃もやし、続松たいまつを拵こしらへて、両方に火をつけ  
て、口にくはへつゝ、夜更よふけ人定りて後、大和やまと大路おほぢへ走  
り出で、南を指して行きければ、頭より五つの火燃上り、

眉まゆ太ふとく、鉄漿かねぐろにて、面おも赤く、身も赤ければ、さながら  
鬼形おにがやうに異ならず。是を見る人、肝魂きもたましひを失ひ倒れ伏し、  
死せずといふ事なかりけり。斯の如くして、宇治うぢの河瀬かはせ  
に行きて、三七日漬ひたりければ、貴船社はからひの計にて、生きな  
がら鬼となりぬ。宇治うぢの橋姫はしひめとは是なるべし。さて妬ねたし  
と思ふ女、其ゆかり、我をすさむ男の親類、境界、上  
下をも選ばず、男女をも嫌きらはず、思ふ様おもにぞ取り失ふ。

男を取らんとては女に変じ、女を取らんとては男に変じ  
て人をとる。京中の貴賤、申まゐの時より下さかりになりぬれば、  
人をも入れず、出づる事もなし。門もんを閉とぢてぞ侍はべりける。